

大谷學報 第十六卷 第四號

神會和尚の『壇語』と考ふべき敦煌出土本につきて

鈴木大拙

昭和五年(中華民國十九年、西、一九三〇)の春、北京大學教授の胡適氏が「神會和尚遺集」を出版し、引きつゞき昭和七年の秋に東京の石井積翠居士が其春入手せられた「神會錄」を影印せられた。此の如く相次いで敦煌出土の寫本が——今まではその存在さへ知られなかつた書物が、出世するに及んで、中華民國に於ける禪宗思想史は異常な光明裡に照らし出さるゝことゝなつた。昭和九年に本篇の記者は公田連太郎氏と共力して石井本「神會錄」の校訂本を出版した。精しき解説や、胡適本との比較研究及び内容思想檢討などにつきては、尙將來の努力を要するが、研究の途だけは、これによりて開かれたと見てよい。とに角、神會が慧能寂滅直後の活動の何ものなりしかは、是等の書物によりて悉知することを得るのである。隨ひて神會から馬祖や石頭の禪風に遷り行く途筋なども其髣髴を窺ひ知り得るのである。又溯りて達摩から慧能に至るまでの禪思想の展開に就いても其跡をた

公開非Web版図

北平國立圖書館藏敦煌寫本「壇語」卷一の一部分（フラグ版）

五三六

二

どり得るすべが見つかつたのである。

昭和九年の初夏、此篇の著者が北平圖書館を尋ねたとき、禪に關する三四の敦煌出土本を見るの機會を得た。それを今「少室逸書」と名づけて影印に付し、併せて解説を書きつゝあるが、その刊行に先ち、其中の第三篇に

「和尚頓教解脫禪門直了性壇語」

との題名を有する一卷子につきて愚見を此に開陳したいと思ふ。その故は此『壇語』なるものと「神會錄」との關係が如何にも密接なるところから、自分は一箇の臆見を有するに至つたからである。

此一卷子は、此に見る如く、大體において讀みにくくないとも云へる。書志學的には別に記すべきほどの事實を知らぬが、その内容と述者について、興味ある觀察が出来る。禪思想史の上に新材料を供給するものである。

結論を劈頭に出せば、此一巻は慧能の所述であることまでは云へぬかも知れぬが、慧能の直弟子のものであるに相違ない。その直弟子と云ふのは荷澤神會以外の人でないと考えられる。これを結論にして、推斷の過程をたどる。

題名に『和尚』とだけで何の誰であるかわからぬが、此一聯中に示唆に富める文字が含まれて居る。『頓教』と『壇語』がそれである。『眞了性』も特別な文字であるが、餘り他に關係をもたないやうだ。併し『眞了性』の眞が直の誤寫であるとする、——どうもさうらしいが、さうすると、面白いこともある。即ち『直了性』となれば、興聖寺本の「六祖壇經」第一節に、『大師是日說頓教法直了見性無礙』とあり、又胡適編「神會和尚遺集」(一七五頁)に『我六代大師二皆言單刀直入、直了見性、不言階漸』……とあるのに聯關して來る。後述の所で、此一巻を慧能系に關係したものと見るが、この愚意を介ける餘事にもなるであらう。(本篇には「直了性」と訂正しておいた。)まづ『壇語』から始める。壇の字がいつも氣に懸つて居た。「六祖壇經」の本當の意義がどうも判然せぬ。壇は檀波羅蜜の檀でないかとも考へた。敦煌本には『法施壇經』と記してある。慧能の得度に戒壇の關係が出るので、

其壇が何かの意味で加へられたのかとも思つた。何れにしても、きちんとした字義がつきとめられぬので、困つて居た。處が、今問題の卷子に「壇經」ではないが、「壇語」とある。慧能の說法と何かの點で交渉があるのではなからうか。所で、此「壇語」を神會和尚の說法だとすると、壇の義がわかる。これから推して、慧能の說法もどんな鹽梅に行はれたかを想像し得る。

「歷代法寶記」に左の記事がある。(金九經板、卷中、十頁。)

『東京荷澤寺神會和上、毎月作壇場、爲人說法、破清淨禪、立如來禪……』

これによりて觀ると、神會は壇を作つて、その上で說法をやつたのだ。特に壇場と書いてあるからには、從來はそんな風にして說法をやらなかつたのか知らん。これが神會の師慧能によりて始めて作られたのではなからうか。敦煌本の「施法壇經」に(外の「壇經」には「施法」の二字は見えぬが)

『慧能大師、於大梵寺講堂中、昇高坐、說摩訶波羅蜜法、授無相戒……』

とある。此文中『昇高坐』の三字は此處では特外の意味を持つたものではなからうか。其後高坐の意味が平凡になつて、即ち普通なものになつて、わざ／＼これを記す必要なく、單に『升坐以』とか『升坐已』とかで濟んだものでなからうか。法師又は禪師が一般的講座を開くことは今までになかつたものと見て可いと思ふ。神會が『毎月壇場を作りて』と特書するには、それだけ其當時希有の事件であつたに相違ない。慧能の『高坐』が即ち是「壇場」と同一義なのではなからうか。

こんな壇場、高坐から説法せられたので、此一卷子は「壇語」と呼ばれて、慧能の「壇經」から區別せられたのではあるまいか。同じく壇上の獅子吼であつても、神會のは、その師の經に對して語と云つて謙下の心持が出て居るのであらうか。かう考へると、慧能の説法に殊に壇の字や經の字があるのが分明になる。

次に『頓教』、これは慧能の宗旨を特性づけて居る、彼及び弟子達は此旗印で法戰に従事したものと考へられる。頓教は時に頓悟ともなる。その意には變りなし。敦煌本の「壇經」には『南宗頓教』の四字が題名として第一に掲げられ、興聖寺本には、『頓教の法を説く』と、殊にその日の説法を色づけて居る。それから『大乘頓教』、『頓悟大乘』、『頓法』、『頓教法』、『頓教法門』など云ふ文字が、『壇經』を通じて讀まれる。それ故、『頓教』の文字があるところ、特にそれが表題の重心をなして居る場合には、その卷子は慧能系、特にその直系に關聯して居ることを證據立てるのである。

後述の所見が既にわかつて居るものとして、「和尚頓教解脫禪門直了性壇語」の意味を解すれば、『和尚』は神會和尚で『頓教』は慧能の宗旨、此によりて『解脫』を教へる『禪門』は、自己本來の性を直ちに了悟することである。これを壇上から説話した、その記録がこれであると云ふことになる。

二

全體から見て、此「壇語」は一場の説法であつたと見られる。いつも『知識』、『知識』と言ひかけて

居るところは、「六祖壇經」の『善知識』と云ふのに似て居る。その頃は大眾に對して此の如き呼掛けが流行して居たものか。

説法の始まりに、無上法の遭遇し難きを説き、正因正縁がないと此機會が獲られぬと云ふ。それには菩提心を發して、至心に懺悔し、一切佛を敬禮しなくてはならぬ。また法寶、僧寶をも敬禮すべきであると教へる。これは「六祖壇經」中に、傳香、懺悔、發願門（敦煌本第二十節より第二十三節）と稱せらるゝ一部分に相當する。思ふに慧能時代頃から説法の順序は、懺悔、歸依、發願と云ふやうな事になつたのであらう。（敦煌本には傳香の一章を缺く。）「壇經」には無相戒と云ふものを別に授受したやうにも見えるが、此『無相』なるものは、三歸戒に對する禪獨特の態度を示したのかも知れぬ。

「壇語」の末文には、『有疑來相問、好去』とあつて、説法の結びがこれについて居る。

説法の主體は「七佛偈」と稱せらるゝもので始まる。これが直ちに戒定慧と結び付く。此結びつきが示唆に富んで居る。それは、「六祖壇經」（敦煌本）第四十一節に、神秀から來參した志誠のため、慧能がなした一場の説話がある、それと對照して見ると面白い。表詮の形においては多少違つて居るが、内面の意味は同一傾向をたどつて居る。兩者何れも神秀の戒定慧觀と對峙する。「壇語」は「壇經」を祖述したと見るべきであらう。

稍進んで左の句に撞着する。

『六代祖師、以心傳心、離文字故、從來相承復如是』

と。此に特に『六代』と云ふところに着目すべし。「神會錄」(鈴木、公田校)第五十三頁に、神會が遠法師の達摩以來宗旨の相傳付囑を問ふに對して『經今六代』と云ふ、これに照らし合して見ると、「壇語」の『六代祖師』は直ちに神會の繼承を意味するものでなくてはならぬ。即ち「壇語」の主人公は神會其人であると云ふことではなくてはならぬ。

三

慧能の一派は『起心看淨』と云ふことに大に反對して、これを妄心とし、直心に背くものとする。妄心とは一にまた用心であり、起心であり、作意である、法縛、住縛、淨縛、寂縛など云ふ各種の縛を生ずるところのものである。「壇語」も亦これを道ふ。「神會錄」の第十一節及び「壇經」の第十四節や第十八節などを参照すれば、此事明白となる。「壇語」に曰はく、

『知識諦聽。爲說妄心。何者是妄心。仁者等。原本仁作人。今既來此間。貪愛財色男女等。及念園林屋宅。此是
籠妄。應無此心。爲有細妄心。聞說菩提。起心取菩提。聞說涅槃。起心取涅槃。聞說空起心取空。
聞說淨起心取淨。聞說定起心取定。此皆妄心。亦是法縛。亦是法見。心若作此心用心。不得解脫。非
本自寂靜。心作住涅槃。被涅槃縛。住空被空縛。住定被定縛。作此用心。皆郭菩提道。般若經云。原本般作槃。

若心取相。即著我人衆生壽者。離一切諸相。即名諸佛。離其法相。原本相作想。維摩經云。何爲病本。爲有攀緣。云何斷攀緣。以無所得故。則無病本。學道若不識細妄。原本學作覺。如何得離生死大海。』「壇語」(§10)

『知識。各用心諦聽。聊簡自本清淨心。聞說菩提。不作意取菩提。聞說涅槃。不作意取涅槃。聞說淨不作意取淨。聞說空不作意取空。聞說定不作意取定。如是用心。即最靜涅槃。云斷煩惱者。不名涅槃。煩惱不生。乃名涅槃。譬如鳥飛虛空。若住於空。必有墮落之患。原本落作落。如學道人。修無住心。心住於法。即是住著。不得解脫。經云。更無餘病。唯有空病。空病亦空。又復經云。常求無念實相智惠。若以法界證法界者。即是增上慢人。』「壇語」(§11)

それから次の對照二三項を見ると、「壇語」と神會との接觸を認めることが出来る。

「壇語」

「神會錄」

〔一九〕 圃。心有是非。不答。無。圃。心有去來處。〔二一〕 諸學道者。心無青黃赤白黑。亦無出入。不答。無。圃。心有青黃赤白。不答。無。圃。心有來。遠近前後。亦無作意。亦不作意。若得如是者。住。不答。心無住處。
名爲相應也。(第二十頁。七頁。)

〔一九〕 圃。和尚言。心既無住。知心無住。不答。知。〔一五〕 又問。無住若爲知。無住。答。曰。無住體上。自

圃。知。不。知。答。今推到無住處。立知。〔二〇〕 有本智。以本智能知。常令本智而生其心。(第十頁。八頁。)

圓、作沒無住。[窓]、是寂靜體即名定、體上有自然

(本性自有般若之智、自用智慧觀照、不假文字。

知、能知本寂靜體、名爲惠、此是定惠等。

[壇經] 第二十八節。

〔二一〕 今推知識無住心、〔如〕是而生其心者、知

〔六〕 本空寂體上、自有般若智能知、不假緣起。

心無住、是本體真寂、從空寂體上起知。

(第九頁)

〔二六〕 爲知識、聊簡煩惱即菩提義、舉虛空爲喻、

〔三五〕 給事中房綰問煩惱即菩提義。答曰、今借

如虛空本無動靜、明來是明家空、暗來是暗家空、

虛空爲喻、如虛空本來無動靜、不以明來即明、暗

〔明空〕不異暗空、明暗自來去、虛空本無動靜、煩

來即暗、此暗空不異明〔窓] 明空不異暗空、明暗

惱與菩提、其義亦然、迷悟雖別有殊、菩提性元不

自有去來、虛空元無動靜、煩惱即菩提、其義亦然、

異。

迷悟雖即有殊菩提心元來不動。

四

定と慧の相關問題は清淨禪と般若禪とを區別する大切な問題である。其れ故、神秀派と慧能派との争の一角は自ら此處に集注せられざるを得ぬ。「壇經」においてもこれが取扱はれ、神會によりても然かせられた。今「壇語」を神會の所述と見るときには、此にも其跡を認めなくてはならぬ。果然「壇語」と定慧の同一なることに説き及ぼして居る。見性を説くものは、智慧を説かざるを得ず、而

して此智慧は識上又は分別上の智でなくて、無分別の眞只中から出るものでなくてはならぬ。此無分別底を寂靜の體とも、清淨の本性とも、眞如とも云ふのである。併し此無分別智の働きは體用同時のものである。先づ體ありて後に用が出るのでもなく、又用を見て而る後體を探がし當てるのではない。即ち定と云ふ體がきまつてそれから慧が動き出るのではない。體用の同一は定慧の同一を意味する。『定慧等』とも云ひ(第二節)、『戒定慧學、一時齊等』とも云ひ(第二節)、『惠時則無定、定時則無惠、如是解者、皆不離煩惱』とも云ひ(第二節)、『定不異慧、慧不異定』(第二節)『此即、定慧双修、不相去離』(第五節)とも云ふのである。燈光の喩は最もよく定慧の同異的關係を明にするものとして、「壇經」にも「壇語」にも出て來る。「神會錄」には少し異つた方面から鏡と像との相關を擧げて居る(第八節)。

まづ「壇經」を擧ぐれば第十三節に曰はく、

『善知識。我此法門。以定惠爲本。第一勿迷言定惠別。』原本定惠作惠定定惠體一不二。即定是惠體。即惠是定

用。即惠之時定在惠。即定之時惠在定。善知識。此義即是定惠等。原本無定字。學道之人作意。莫言先定

發惠。先惠發定。定惠各別。作此見者。法有二相。口說善心不善。定惠不等。原本定惠作惠定心口俱善。內

外一種。原本二下定惠即等。自悟修行。不在口諍。若諍先後。即是迷人。原本無迷字。不斷勝負。却

生我。不離四相。』「壇經」(§13)

次に燈光の喩は左の如くである(第十五節)。

『善知識。定惠猶如何等。如燈光。有燈即有光。無燈即無光。燈是光之體。原本無燈字之作知。光是燈之用。名

即有二。原本無名字。體無兩般。此定惠法。亦復如是。』〔壇經〕(§15)

〔神會錄〕によれば(第十九節)、

『愍法師問。云何是定慧等義。

答曰。念不起。空無所有。即名正定。以能見念不起。空無所有。即

名正慧。若得如是。即定之時。名爲慧體。即慧之時。即是定用。即定之時不異慧。即慧之時不異定。即定之時即是慧。即慧之時即是定。即定之時無有定。即慧之時無有慧。何以故。性自如故。是名定慧等學。』〔神會錄〕(§19)

『澄禪師先修定。定已後發慧。會即不然。正共侍御語時。即定慧俱等。是以不同。侍御言。闍梨。

只沒道不同。答。一纖毫不得容。又問。何故不得容。

答。今實不可同。若許道同。即是容

語。』〔神會錄〕(§29)

上來の引文を通讀して、それから「壇語」を見ると、その思想がどの邊から來て居て、その述者の誰たるかも、略々見當をつけ得る。第三十五節に曰はく

『如世間燈光不_二相去離。定不_二異惠。惠不_二異定。如世間燈光不_二相去離。即燈之時光家體。即光之時燈家用。即光之時不_二異燈。即燈之時不_二異光。即光之時不_二離燈。即燈之時不_二離光。即光之時即是燈。

即燈之時即是光。定惠亦然。即定_レ時是惠體。即惠之時是定用。即惠之時不異定。即定之時不異惠。即惠之時即是定。即定之時即是惠。即惠之時無有惠。即定之時無有定。此即定惠雙修。不_レ相去離。』
「壇語」(§25)

五

「壇經」及びこれを繼ぐもの、宗旨は「無念」である。「無念、無相、無住」(「壇經」一四頁)と續き、或は「無念、無憶、無著」(「同」二六頁)と續き、或は「無念、無爲、無所得」(「歷法」下一頁)或は「無憶、無念、無忘」(「同下」土ウ)などとなることもあるが、無念は、いつも中心の思想となつて居る。無念又は無心となることもあつた。何れにても可なりである。「壇語」の無念論は如何にかと云ふに、

『眞如は無念之體、以是義故、立無念爲宗、若無念者、雖具見聞覺知而常空寂』(第二十節)と教ゆ。これに對して「壇經」では、

『眞如是念之體、念是眞如之用、自性起念、雖_レ即見聞覺知、不染_レ萬境、而常自在』(第十)と云ひ、神會は

『所言念者、是眞如之用、眞如者、即是念之體、以是義故、立無念爲宗、若言無念者、雖有見聞覺知而常空寂。』(第二十) (三頁)

これで見ると、無念と眞如との關係が「壇語」と「壇經」及び「神會錄」との間において、相違して居

るやに一讀思はれる。併し前後の關係や全體の意義から推して見ると、無念を以て眞如の體となすも、念を以て眞如の體となすも、兩者畢竟じて同一義を指して居るのである。然らざれば兩者俱に『無念を立して宗となす』となすとは云へぬのだ。また『見聞覺知すと雖常自在なり』とか、『常に空寂なり』とかは云へぬのだ。時間的に云へば無念、空間的に云へば無住、物理學的に云へば無相、心理學的に云へば無心、何の方面から説明しても、其體とする所は眞如と云ふより外ないのである。

慧能は

『無念者於念而不念』(第十六頁)。

『於一切境上不染名爲無念』(第十四頁)。

『無念法者、見一切法、不著一切法、遍一切處、不著一切處、常淨自性、便六識從六門走出、於六塵中不離不染來去自由、卽是般若三昧、自在解脫、名無念行』(第三十頁)。

神會は

『所謂不念有無、不念善惡、不念有邊際、無邊際、不念有限量、無限量、不念菩提、不以菩提爲念、不念涅槃、不以涅槃爲念、是爲無念、無念者卽是般若波羅蜜……、若也起心卽滅、覺照自亡、卽は無念、是無念者無一切境界、有一切境界卽興無念不相應故』(第十六頁)。

「壇語」には曰ふ、

『譬如鳥飛於虛空、若住於空、必有墮落之患、如學道人修無住心、心住於法、即是住着、不得解脫』(§11)。
『定慧等者、明見佛性、今推心到無住處、便立知、知心空寂、即是用處。』(§20)。

『若入定、一切諸波羅蜜不知故、但自知本體寂靜、空無所有、亦無住者、等同虛空、無處不遍、即是諸佛眞如身』(§23)。

『但「不作意、心無有起、是無念」(§30)。

是等の諸引文を對照すれば、何れも同一思想の言詮に過ぎないことが判然とする。「壇經」、「神會錄」、「壇語」、此間には、一貫した精神がある。單に同じ佛教とか、南宗とか云ふ廣い意味のものでなく、もつと緊密な、殆んど人格的な連鎖さへ見られる。「壇經」を「六祖壇經」と云ふなら、「和尚頓教解脫禪門直了性壇語」を「神會壇語」と云つてよい。

六

尙參考までに無住和上の無念説の一部を紹介しておく。無住は弘忍—智詵—處寂—無相—無住と傳承した人で、神會と同時代である、神會より十五年ほど遅れて示寂す。それ故、其頃には神秀一派の『清淨禪』と云ふべきものが流行して居た。無住は慧能會下ではないが、その無念説が垢淨を超越して『不染於一切法』的のものであつた點では、南宗と同じ。神秀—老福(義福?慧福?)—知一とつ

づく此知一なる人が無住を訪ねて道を問ふ。如何なる修行をやつて居るかと問はれて、本師の教をそのまゝにして、『淨を見る』修行をやると答ふ。無住の説法に曰ふ。

『法無垢淨、云何看淨、此間淨由不立、因何有垢、看淨卽是垢、看垢卽是淨、妄想是垢、無妄想是淨、取我是垢、不取我是淨、無念卽無垢、無念卽無淨、無念卽無是、無念卽無非、無念卽無自、無念卽無他、自他俱離、成佛菩提、正自之時、自亦不自』(歷、法、下二十丁)

七

「壇語」中で最も示唆に富むと思はるは左の一節である。これでその當時の禪法が如何なる傾向を帯びて居て、これに對する「壇語」の態度が、どんなものであるかが、よくわかる。而して又此「壇語」は「壇經」や「神會錄」に對して如何なる關係を有つものかと云ふことも、よくわかる。

住心看淨、起心外照、攝心內澄、非解脫心、亦是法縛。若有坐者、凝心入定、住心看淨、起心外照、攝心內澄、心、不中用。(壇語)。

(神會錄)
第二十七頁)

和尚答曰、若教人凝心入定、住心看淨、起心外照、攝心內證者、此是障菩提。(胡適、「神」
第一七五頁)

答曰、今言不同者、凝心取定、或有住心看淨、或有起

心外照、或有攝心內澄、或有起心觀心而取於空、或有覺妄俱滅、不了本性、住無記空、如此之輩、不可具說（神會錄）。
（第一九頁）

神會が極力此種の禪法を排したのは、慧能以來の傳承である。慧能の「壇經」に曰はく、

『善知識、又見有人教人坐、看心看淨、不動不起、從此置切、迷人不悟、便執成顛、卽有數百般以如此教道者、故知大錯』（第十節）。

又曰はく、

『善知識、此法門中、坐禪元不著心、亦不著淨、亦不言不動、若言看心、心元是妄、妄如幻故、無所看也。……不見自性本淨、起心看淨、却生淨妄……迷人自身不重、開口卽說人是非、與道違背、看心看、却是障道因緣』（第十節）。

言葉の遣ひ方には多少の相違はあるが、意圖の傾向は同一である。思ふに、これは神秀派の禪法に對してなされたのである。慧能時代には神會時代のやうにまだ『凝心入定』云々と固定した思想に、成つて居なかつたかも知れぬ、因に、「臨濟錄示衆中に『祖師云、爾若住心看靜淨、舉心對照、攝心內證、凝心入定、如是之流、皆是造作』と云ふ文字がある。『皆是造作』は臨濟自身の句であらうが、住、舉、攝、凝の成句は、明白に神會所述中のものである。臨濟の頃までも北宗神秀派の禪法が残つて

居たか知らむ。崇岳の普寂及び東岳の降魔、此兩禪師——何れも神秀の資によりて、主として此禪法が唱へられたと云ふのであるが、(胡適編「神會和尚遺集」百七十五頁)その由て起るところは、遠く弘忍に在りと見るべきだ。尙「壇語」と「神會集」とを對照せんに、

知識、一切善惡物莫思量、不得凝心住、亦不得將心、答大乘定者、不用心、(不看心、不看靜、不觀空、不住直視、心墮直視住、不中用、不得睡眠向下、便墮(睡)) 心、不澄心、不遠看、不近看、無十方、不降伏、無怖畏、眼住、不中用、不得作意攝心、亦復(不得)遠看近看、無分別、不沉空、不住寂、一切妄想不生、是大乘禪皆不中用、經云、不觀是菩提、無憶念故、卽是自性空 定。(胡適校、「神會集」第一五頁。)

寂。(壇語)。
(第一八節)。

此對比によりて「壇語」と「神會錄」とが俱に同一事を語るものであることが分明になる。それだけでなく、何れもの作者が同一の人物であることも認めなくてはならぬ。否らざれば此くまで同一の氣分、思想傾向の現はれることはない。序に、「遠看」、「近看」の意味は、「楞伽師資記」弘忍傳によりて判じ得ると思ふ。金九經校刊本、(二十六丁ッ)に「備坐時、平面端身正坐、寬放身心、盡空際、遠看一字、自有次第、若初心人攀緣多、且向心中看一字」云々の聯句がある。神會は此種の禪法を固執して移ることを知らざる神秀一派に對して、般若禪を鼓吹したのである。

八

「壇語」には經典よりの文がその數三十を超えて居る。一卷子の說法としては割合に多く引かれたものである。只『經云』としたところもあるが、わかつて居るところでは、「維摩經」が一番多く、それから「涅槃經」、「金剛般若經」、「勝天王般若經」、「法華經」、「華嚴經」、「起信論」、其他と云ふことになつて居る。「維摩經」は禪宗の成立に多大の影響を及ぼした如く見ゆる。「楞伽經」と禪とは特別の關係があるのであるが、それで居て、「楞伽」からの引文は、達摩から慧能、神會に至るまで、寥々たるものである。『佛語心を宗となす』の一句子が主として目立つのみだ。達摩宗は心の一字によりて建立せられ、それから慧能に至りて般若の智慧が高調せられた。さういふ次第で、神會などは「金剛般若」の外に經典はないやうにさへ云ふ。併し引文は「維摩」から多く取られる。「維摩」が支那及び日本の佛敎に及ぼせる影響は、實に深大なるものがある。

「壇語」と「神會錄」に共通して見える經典の引文は、ざつと十箇ある。列擧するとかうである。

一、「維摩經」、『不於三界現身意、是爲宴坐。』〔壇〕§13: (神) pp. 14, 28)

(この種の宴坐は慧能にも喜ばれた、慧能は維摩を引いて不動主義の坐禪を痛撃する。)

二、「涅槃經」、「定多惠少、增長無明。惠多定少、增長邪見、定惠等者明見佛性。』〔壇〕§20: (神) p. 31.)

三、「金剛般若經」、「若心取相、卽著我、人、衆生、壽者。』〔壇〕§16: (神) p. 14.)

四、「金剛般若經」、「菩薩摩訶薩、應生清淨心、不應住色生心、不應住聲香味觸法生心。』〔壇〕§21: (神) p. 18.)

五、「維摩經」、「我觀如來前際不來、後際不去、今則無住。」「〔壇〕§ 27. p. 46. 〔神〕

六、「維摩經」、「如自觀身實相、觀佛亦然。」「〔壇〕§ 27. p. 46. 〔神〕

七、經、「虛空無中邊、諸佛身亦然。」「〔壇〕§ 32. p. 35. 〔神〕

八、「法華經」、「即同如來知見廣大深遠、心無邊際、同佛廣大心限量同深遠更無差別。」「〔壇〕§ 21. p. 36. 〔神〕

九、經、「諸法無來去、法性遍一切處、故法無去來。」「〔壇〕§ 36. 〔神〕p. 43. には經云、菩提無去來今とあり。

二〇、「勝天王般若經」、「大王卽是如實、大王不變異。世尊云何不變異。大王、所謂如如。世尊云何如

如。大王、此可智知、非言說能、離相無相、遠離思量、過覺觀境、是爲菩薩了達甚深法。」「〔壇〕§ 28. p. 51. 〔神〕

同一の引文が此く多數に「神會錄」と「壇語」によりて使はれて居るところを見ると、どうしても、兩者の間に述作者の同一と云ふことを考へなくてはならぬ。

九

一切の衆生は本來涅槃に入つて居るので、此上工夫をして涅槃に入る必要がないこと、無漏の智性は本自具足のもので何等作意を用ゐるに及ばぬこと、これは何れも大乘の定説であるが、そんなら今衆生は現に生死に流浪して、解脱を得ぬのは何故かと云ふに、それは煩惱に覆はれて居るからだ。これも一般に禪者の教ゆる所であるが、そんならどうしたら好いかと云ふに、それには善知識の指導が必要であると。「壇語」はさう教へる（§ 14.）。神會（p. 28—9.）も亦然りである。

善知識に教へられて發心することになる。これが發菩提心と云はれて、「般若經」などには最も大切なこととせられて居る。「壇語」もこれを以て佛法成就の正因正縁として頗る重きを置いて居る。曰く

是故敬禮初發心、初發心爲天人師、勝出聲聞及緣 答、大乘言下悟道、初發心時、便登佛地、無去來今、覺、如是發心過三界、是故得名最無上。(卷三) 畢竟解脫。(胡適、神會遺集) p. 173

神會又曰ふ、『但遇眞正善知識、一念相應、便成正覺、豈不是出世不可思議事、又經云、衆生見性成佛道、龍女須臾頓發菩提心、便成正覺』と。(鈴木、公、校、神會錄) 第二五頁

併し分別事實の上では、此の如きは上根機の衆生で始めて可能なことである。中下の根機に至りては必ず如響如啞でなくとも、領解は中々容易ならぬ。「壇語」に曰ふ(卷三)

『佛在日、亦有上中下衆生、投佛出家、過去諸佛說法、皆對八部衆說、不私說、不偷說、譬如日午時無處不照、如龍王降雨、平等無二、一切草木、隨類受潤、諸佛說法、亦復如是、皆平等心說、無分別心說、上中下衆、各自領解、經云、佛以一章演說法、衆生隨隨各得解。』

「壇經」(p. 26) の意も亦同じ、曰はく、『此是最上乘法、爲大智上根心說、少根智人、若聞法心不深信、何以故、譬如大龍若下大雨、雨於閻浮提、城邑聚落、悉皆漂流、如漂草葉、若下大雨雨於大海、不增不減、若大乘者、聞說金剛經、心開悟解、……少根之人聞說此頓教、猶如大地草木根性自小者、若被大雨一沃、悉皆

自倒、不能增長。』

一〇

此で結論に云はく、「壇語」の一卷子は慧能の「壇經」と、その内容において、思想一般の傾向において、酷似して居る、その接近の度は極めて近い。『六代祖師、以心傳心』の句より見て慧能その人の所述とは云へぬが、その直弟子、神會のものであると云ふことは可能である。同じく燉煌出土の「神會錄」(胡適本及び石井本)と如上對照の跡を點檢すれば、讀者は必ず予と同意見を有するに至るものと信ずる。禪思想史の研究に此新資料の發見せられたるは喜ばしい事である。

(本篇中引用の書は、

胡適校、燉煌唐寫本、「神會和尚遺集」、上海、亞東圖書館發行、昭和五年版。

金九經校、燉煌本、「歷代法寶記」、滿洲奉天、校訂者發行、昭和八年版。

鈴木大拙校、燉煌本、「神會錄」及び「六祖壇經」、東京、森江書店發行、昭和九年版
公田連太郎

鈴木大拙校、燉煌本、「少室逸書」、京都、鈴木發行、昭和十年版。

和尙頓教解脫禪門直了性壇語

原本直作真。

〔一〕 無上醫提法。諸佛深歎不思議。知識既能來各各發無上菩提心。諸佛菩薩。真正善知識。極甚難遇。昔未曾聞。今日得聞。昔未得遇。今日得遇。佛告迦葉。從兜率天。放一顆芥子。投閻浮提一針鋒。是爲難不。迦葉菩薩言。甚難世尊。佛告迦葉。此未爲難。正因正緣。得相值遇。此是爲難。

〔二〕 云何正因正緣。知識發無上菩提心。是正因。諸佛菩薩。真正善知識。心得究解脫。是正緣。得相值遇。爲善知識。

〔三〕 是凡夫口有無量惡念。口上惡脫心字。久輪轉生死。不得解脫。口自發菩提心。爲知識懺悔。各各禮佛。敬禮過去際一切佛。敬禮未來際一切諸佛。原本諸作識。敬禮現在際一切諸佛。敬禮般若尊法修多羅藏。敬禮諸大菩薩一切賢聖僧。各各至心懺悔。原本至作志。

〔四〕 今知識三業清淨。過去未來及現在。身口意業四重罪。我今至心盡懺悔。願罪消滅永不起。過去未來及現在。身口意業七逆罪。我今至心盡懺悔。願罪消滅永不起。過去未來及現在。身口意業十惡罪。我今至心盡懺悔。願罪消滅永不起。過去未來及現在。身口意業鄣重罪。我今至心盡懺悔。願罪消滅永不起。

〔五〕 現在知識等。今者已能來此道場。各各發無上菩提心。求無上菩提法。若求無上菩提。須信佛語。依佛教。

〔六〕 佛道沒語。經云。諸惡莫作。諸善奉行。自淨其意。是諸佛教。過去一切諸佛。皆作是說。諸惡莫作。是戒。諸善奉行。是惠。自淨其意。是定。知識要須三學。始名佛教。何者三學等。戒定惠是。安心不起名爲戒。無安心名定。知心無妄名惠。是名三學等。

〔七〕 各須護持齊戒。若不能齊戒。一切善法。終不能生。原本終若不求無上菩提。疑衍要須護持齊戒。乃可得入。若不持齊戒。疥癩野干之身。尙自不得。豈獲如來功德法身。知識學無上菩提。不淨三業。不持齊戒。言其得者。無有是處。原本無作得。

〔八〕 要藉有作戒有作惠顯無作惠。定則不然。若修有作定。則是人天因果。不與無上菩提相應。原本缺善字。

〔九〕 知識。久流浪小死。經恆沙大劫。不_レ解脫者。原本經爲_レ不_レ會發無上菩提心。即不值遇諸佛菩薩真正善知識。縱值遇諸佛菩薩真正善知識。又復不能發無上菩提心。流轉生死。經無量恆沙大劫。不_レ解脫者。總緣此。

〔一〇〕 又縱發心者。只發二種家人天心。人天福盡。不免還墮。諸佛出世。如恆河沙。諸大菩薩出世。如恆河沙。一一諸佛菩薩善知識出度人。皆如恆河沙。諸佛菩薩善知識。原本無善字。何不_レ值遇。今流浪生死。不得解脫。良爲與過去諸佛菩薩真正善知識。無一念無上菩提緣。來或有知識。不_レ了無上菩提法。儻將二家

聲聞及人天法教。知識。喻如穢食置於寶器。知識。發無上菩提心是寶器。何者是穢食。二家人天法是穢食。雖獲少善生天。天福若盡。還同今日凡夫。

〔一一〕 知識。今發心學。波羅密相應之法。超過聲聞緣覺等。原本超作起。同釋迦牟尼佛授彌勒記。亦更無別。如二家人。執定經。歷劫數。如須陁洹。在定八萬劫。斯陁含在定六萬劫。阿那含在定十千劫。何以故。住此定中。劫數滿足。菩薩訶薩方乃投機說法。然始發菩提心。同今日知識發菩提心不別。

〔一二〕 當二家在定時。縱爲說無上菩提法。終不肯領受。經云。天女語舍利弗云。凡夫有返覆。而聲聞無也。己來登此壇場。學修般若波羅密時。願知識各各心口發無上菩提心。不離坐下。信中道第一義諦。

〔一三〕 夫求解脫者。離身意識。五法。三自性。八識。二無我。離內見外見。亦不於三界現身意。是爲宴坐。如此坐者。佛卽印可。六代祖師。以心傳心。離文字。故從相承。復如是。

〔一四〕 知識。一身具有佛性。善知識不將佛菩提法與仁者。原本仁作人。亦不爲仁者安心。原本仁作人。何以故。涅槃經云。早已授仁者記。原本仁作人。一切衆生。本來涅槃無漏智性。本自具足。何爲不見。今流浪生死。不得解脫。爲被煩惱覆。故不能見。要因善知識指授。方乃得見。故卽離流浪生死。使得解脫。

〔一五〕 知識。永前所有學處。且除却莫看。知識。學禪已來。經五十年者。廿年者。今聞深生驚怪。所言除者。但除妄心。不除其法。若是正法。十方諸佛未除不得說。今善知識能除得。猶如人於虛空中行住。

坐臥不離虛空。無上菩提法。亦復如是。不可除得。一切施爲運用。皆不離法界。經云。但除其病。不除其法。

〔一六〕 知識諦聽。爲說妄心。何者是妄心。仁者等。原本仁作人。今既來此間。貪愛財色男女等。及念園林屋宅。此

是麤妄。應無此心。爲有細妄心。聞說菩提。心取菩提。聞說涅槃。起心取涅槃。聞說空起心取空。聞說淨起心取淨。聞說定起心取定。此皆妄心。亦是法縛。亦是法見。心若作此心用心。不得解脫。非

本自寂靜。心作住涅槃。被涅槃縛。住空被空縛。住定被定縛。作此用心。皆鄣菩提道。般若經云。原本般若作槃。

若心取相。即著我人衆生壽者。離一切諸相。即名諸佛。離其法相。原本相作想。維摩經云。何爲病本。爲有攀

緣。云何斷攀緣。以無所得故。則無病本。學道若不識細妄。原本學作覺。

〔一七〕 知識。各用心諦聽。聊簡自本清淨心。聞說菩提。不作意取菩提。聞說涅槃。不作意取涅槃。聞

說淨不作意取淨。聞說空不作意取空。聞說定不作意取定。如是用心。即最靜涅槃。云斷煩惱者。

不名涅槃。煩惱不生。乃名涅槃。譬如鳥飛於虛空。若住於空。必有墮落之患。原本落作落。如學道人。修無住

心。心住於法。即是住著。不得解脫。經云。更無餘病。唯有空病。空病亦空。又復經云。常求無念實相智慧。

若以法界證法界者。即是增上慢人。

〔一八〕 知識。一切善惡。總莫思量。不得疑心住。亦不得將心直視心。墮直視住。不中用。不得睡眠向

不使墮睡眠住。不中用。不待作意攝心。亦不得遠看近看。原本得作復。皆不中用。經云。不觀是菩提。無意念

故。卽是自性空寂。

〔一九〕 問。心有非。不答。無。

問。心有去來處。不答。無。

問。心有青黃赤白。不答。無。

問。心有住

不答。心無住處。

問。和尙言。心卽無住。知心無住。不答。知。

問。知不知。答。今推到無住處。立知。

〔二〇〕 作沒無住。是寂靜體。卽名定。體上有自然知。能知本寂靜體。名爲惠。此是定惠等。經云。寂上起照。此義如是。無住心不離知。知不離無心。卽無住。更無餘知。涅槃經云。定多惠少。增長無明。惠多定少。增長耶見。定惠等者。明見佛性。今推心到無住處。便立知。知心空寂。卽是用處。

〔二一〕 法華經云。卽同如來。知見廣大深遠。心無邊際。同佛廣大。心無限量。同深遠更無差別者。諸菩薩行深般若波羅密多。佛推諸菩薩病處如何。般若經云。菩薩摩訶薩。應生清淨心。不應住色生心。不應住聲香味觸法生心。應此並用無所住者。今推知識無住心。是而生其心。

〔二二〕 知心無住。是本體空寂。從空寂體上起知。善分別世間青黃赤白。是惠。不隨分別起。是定。只疑如心入定。墮無記空。原本墮作隨。記作既。出定已後起。心分別一切世間。有喚此爲安心。此則惠時則無定。定時則無惠。如是解者。皆不離煩惱。住看淨起。心外照。攝心內證。非解脫心。亦是法縛心。不中用。

〔二三〕 涅槃經云。佛告琉璃光佛。下佛字恐衍善男子。汝莫作入甚深。何以故。令大衆鈍故。若入定一切諸波

羅密不知。原本密作客。故但自知本體寂靜。空無所有。亦無住著。等同虛空。無處不遍。卽是諸佛真如是無念

之體。以是義故。立無念爲宗。若無念者。雖具見聞覺知。而常空寂。卽戒定惠學。一時齊等。萬行俱備。卽

同如來。知見廣大深遠。云何深遠。以不見性。故言深遠。若了見性。卽無深遠。

〔二四〕 各各至心。令知識得頓悟解脫。若眼見色。善分別一切色。不隨分別起。色中得自在。色中得

解脫。色塵三昧足。耳聞聲。善分別一切聲。不隨分別起。聲中得自在。原本重聲中得自在五字。聲中得解脫。聲塵

三昧足。鼻聞香。善分別一切香。不隨分別起。心中得自在。香中得解脫。香塵三昧足。舌嘗味。原本

衍不隨二字。善能分別種種味。不隨分別起。味中得自在。味中得解脫。味塵三昧足。身覺種種觸。善能分

別觸。不隨分別起。觸中得解脫。觸中得自在。原本無得字。觸中三昧足。意分別一切法。不隨分別起。

法中得自在。法中得解脫。法塵三昧足。如是諸根善分別是本惠。不隨分別起。是本定。

〔二五〕 經中不捨道法。而現凡夫事。種種運爲世間。不於事上生念。是定惠雙修。不相去離。定不異

惠。惠不異定。如世間燈光不相去離。定不異惠。惠不異定。如世間燈光不相去離。卽燈之時光家體。

卽光之時燈家用。卽光之時不異燈。卽燈之時不異光。卽光之時不離燈。卽燈之時不離光。卽光之

時卽是燈。卽燈之時卽是光。定惠亦然。卽定之時是惠體。卽惠之時是定用。卽惠之時不異定。卽定之

時不異惠。卽惠之時卽是定。卽定之時卽是惠。卽惠之時無有惠。卽定之時無有定。此卽定惠雙修。

不相去離。後二句者。是維摩詰默然直入不二法門處。原本直入作入直。

〔二六〕 爲知識聊簡煩惱卽菩提義。舉虛空爲喻。原本虛作處。如虛空本無動靜。明來是明家空。暗來是暗家

空。明空不異暗空。明暗自來去。虛空本無動靜。煩惱與菩提。其義亦然。迷悟雖別有殊。菩提性元不異。

〔二七〕 經云。如自觀身實相。觀佛亦然。知心無住。是觀過去諸佛心亦同。知識。今日無住心無別。經云。我觀如來。前際不來。後際不去。今則無住。

〔二八〕 夫求法者。未恐當作夫。

不著佛求。不著法求。不著衆求。何以故。爲衆生心中各自有佛性故。若起

心外求者。卽名耶求。勝天王毘尼經言。大王。卽是如實。大王不變異。世尊云何不變異。大王。所謂如如。世尊云何如如。大王。此可智知。非言能說。原本能說作說能。離相無相。遠離思量。過覺觀境。是爲菩薩甚深法。卽同佛知見。

〔二九〕 知識。自身中有佛性。未能了了見。何以故。喻如此處各各思量家中。宅住衣服臥具及一切等物。具知有。更不生疑。此名爲知。不名爲見。若行致宅中。具知上說之物。卽名爲見。不名爲知。

〔三〇〕 今所覺者。具依他說。知身中有佛性。未能了了見。但不作意。心無有起。是真無念。畢竟不離知。知不離見。一切衆生。本來無相。今言相者。並是妄心。心若無相。卽是佛心。若作心不起。是識定。亦名法見。心自性定。

〔三一〕 馬鳴云。若有衆生觀無念者。則爲佛智。故今所說般若波羅密。從生滅門。頓入真如門。更無前照後照。遠看近看。都無此心。乃至七地以前菩薩。都總慕過。唯指佛心。卽心是佛。經云。當如法說。口說菩薩。心無住處。口說涅槃。心說寂滅。說字可疑。口說解脫。心無繫縛。向來指知識無住心。知不知。答知。

〔三二〕 涅槃云。此是第一義空。若三處俱空寂。唯有中道。亦不在其中。中道義因邊立。原本無中字。猶如三指

並同。要因兩邊始立。指若無兩邊。中指亦無。原本亦作上。經云。虛空無中邊。諸佛身亦然。諸解脫法身亦如處。虛空無中邊。

〔三三〕 知識。常須作如是解。今將無上道法。分付知識。引經。若領此語。六波羅密。恆沙諸佛。八萬四千諸三昧門。一時灌入知識身心。維摩經云。菩提不可以身得。不可以心得。寂滅是菩提。滅諸相故。不可以身得。心不在外。不可以心得。不在內。寂滅是菩提。中間無處所。滅諸相故。一切妄念不生。此照體獨立。神無方所。知識當如是。用。

〔三四〕 上根上智人。見說般若波羅密。便能領受。如說修行。如中根人。雖未得。若勤諮問亦得入。下根人。但至信不退。當來亦能入。大家十信位中。

〔三五〕 只如學道人。撥妄取靜。是悟靜非本身淨。花嚴經云。譬如拭巾有垢。先著灰汁。然用淨水洗之。此雖得淨。未名爲淨。何以故。此淨爲因。垢得淨。猶故不淨。維摩經云。非垢行。非淨行。是菩薩行。

〔三六〕 知識。非用心時。若有妄起。思憶遠近。不須攝來。何以故。去心既是病。攝來還是病。去來皆是病。經云。諸法無來去。法性遍一切處。故法無去來。若有妄起。卽覺覺滅。卽是本性無住心。有無雙遠。境智俱亡。俱莫作意。卽自性菩提。若微細心。卽用不著。本體空寂。無有一物可得。是名阿耨菩提。無維摩經云。從無住本。立一切法。涅槃光戒光。亦復如是。

〔三七〕 自性空寂。無有形相。發心畢竟亦不別。如是二心先心難。自未得度。先度他。是故敬禮初發心。

以爲天人師。勝出聲聞皮緣覺。如是發心過三界。是故得名最無上。

〔三二八〕 諸家借間隱而不說。我於此門都不如是。多人少人。並皆普說。若於師處。受得禪法。所學各自平章。唯通其心。若心得通。一切經論。義無不通者。佛在日。亦有上中下衆生。投佛出家。過去諸佛說法。皆對八部衆說。不私說。不偷說。譬如日午時無處不照。如龍王降雨平等無二。一切草木。隨類受潤。諸佛說法。亦復如是。皆平等心說。無分別心說。上中下衆。各自領解。經云。佛以一音演說法。衆生隨類各得解。

〔三二九〕 知識。若學般若波羅密。須廣讀大乘經典。見諸教禪者。不許頓語。要須隨方便。始悟。此是大下品之見。明鏡可以盥容。原本容作客。大家經可以正心。第一莫疑。依佛語。當淨三業。方能入得。大家此頓門。一依如來說。修行。必不相悟。勤作功夫。有疑來相問。好去。